

中世後期における在地領主経済の構造と消費

近江国朽木氏を事例として

湯浅治久

The Economic Structure and Consumption of Resident Fudal Lords in the Later Middle Ages: The Case of the Kutsuki Family

はじめに

- ①「社本所一円領・武家領体制」と朽木氏領主支配の特質
- ②朽木氏の「狭義の家産経済」
- ③朽木氏の「所領」全体における財政（広義の家産経済）
- ④高島郡の流通構造と朽木氏の地域支配
おわりに

【論文要旨】

本稿は中世後期における在地領主レヴェルの経済構造を明らかにした上で、そこにおける消費の問題を、流通や交通に留意して明らかにすることを目的にしたものである。対象とするのは、近江国高島郡の朽木氏である。

朽木氏は、佐々木氏の一族で中世後期には室町幕府奉公衆の身分をもち、本貫地の朽木庄のほか、多くの「所領」を持つ在地領主（国人領主）である。従来はその政治的位置、あるいは村落・土豪などへの支配のありかたを中心に考察がなされてきたが、その「所領」を総体として位置付けた上での考察は見られなかった。また朽木氏は『朽木家古文書』のほか、在地領主経済の実態を示す史料に恵まれていたにもかかわらず、在地領主の経済構造について考察した論稿もごくわずかであった。近年の流通史・交通史研究の深化は、むしろ在地領主という中世後期社会の基本的な階層の経済のありかたの実態解明を要請しているものと考えられるが、その意味で朽木氏の場合を考

察することはきわめて重要な課題である。

そこで本稿では、筆者の前稿（「中世後期における在地領主の収取と財政」『史学雑誌』九七―七、一九八八年）を前提に、そこで言及できなかった使う消費の観点をふまえた上で、朽木氏経済の全体的な性格について考察を行った。本領朽木庄以外の「所領」の性格を明らかにした上で、その家産経済を「狭義」と「広義」に便宜上分け、主に帳簿類の検討から課題にせまった。その結果、朽木氏の領主経済の様態が、中心都市京都への求心的な構造を持つ若狭国・近江国高島郡との地域的な経済秩序との関連で位置付けられたように思う。またその上で、朽木氏の政治的立場、あるいは在地領主としての地域への支配が、とくに高島郡という「郡」秩序との関わりでいかなる特質を持つのかについて言及した。